

拝啓、秋風の候皆様に於かれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

私の[]が急逝して間もなく1年になります。大学ではすでに過去のことであるかと存じますが、私は[]研究科の教授の対応と静まり方に疑問を感じたまま今日に至っております。あまりにも汚いです。

1年前のこととして終わらせず、今一度、大学として[]研究科の人事のあり方を調査の上、[]の状況についての御説明をお願い申し上げたく、本日はお手紙を差し上げた次第です。

昨年4月頃、[]教授から[]助手採用の勧めがありました。[]センター長が使おうとしていた助手の空席は櫻井の分だとして話を止めたとの事でした。もし適当な候補者がいないのであれば、任期切れの間近い[]助手に席を貸してはどうかとの勧めもありました。[]は、自分の助手という意味から、別の候補者探しに入りました。この時点から、[]センター長に逐次了解を取りながら話を進めました。7月、センター長に最終確認をし候補者に伝えた翌日、気が変わったとしてセンター長が話を白紙に戻しました。夫はそれまでセンター長を心から信頼しておりましたので、まさに晴天の霹靂でした。その直後からこの空席について[]研究科の教授から要求が相次ぎ、相当のストレスを抱えるようになりました。その最中での突然死でした。

葬儀でセンター長は弔辞を述べましたが、その裏側での対応は全くの別人です。夫は分析装置を開発しましたが、死亡した翌日まだ通夜もすまない時点で、センター長は私にその装置を移動する、つまり廃棄すると言いに来ました。この他にも何故かと疑問に感ずることがあります。

葬儀の後、事務官から宿舍の期限について20日間との話があり、その場で何日に引越すかと聞かれました。後日、ある教授から6ヶ月との連絡がありましたが、事務官からは6ヶ月という話は最後まで一度も出ませんでした。この教授はそれを予測されていて、「事務局長が認めている。事務官には何も聞くな。日程の即答もしない方がよい」と、私に助言されていました。事務手続きの際は、必ず書類についての説明がありました。唯一黙って差し出され一言の説明も無かったのが、宿舍の猶予願いの書類でした。その時の異様な雰囲気忘れられません。私は事務官の方々に腹を立てているではありません。恐らく誰かの指示、又は顔色を見ての対応であったと思うからです。それを是非明らかにしていただきたくお願い申し上げます。

教官が死亡した時に、大学に心当たりがあつてはならないはずです。ところが葬儀の翌日、「人のいるところではまずい。本当のことを聞きたい。急性心不全とは誰も信じない。彼は相談に来ていたし、これから動きを起こそうと言うところだった。」と、ある教授が宿舍まで来られました。自殺だと確信している様子でした。教授は気づいておられませんが、このとき宿舍には夫の母がおり、耳に入れて大丈夫か私には判断がつかず詳しい話はできませんでした。

別の教授からは、追悼文を書くので話を聞きたいとの連絡がありました。[]に来て何年目かというような質問を一つ二つされた後、「助手を早く採っておけば良かったんですよ」と切り出されましたので、一晩で白紙になったと答えました。「横槍が入った。こう

いう話は周囲を固めていかないといけない」と言われ、私が「それはセンター長を信頼していたからです」と答えると「決定権はセンター長にある。私なら決まっていた。(席を貸す話については) 私は一言も言っていない。あの人達は彼を使いたいのだ」と話が続き「結局はよくわからんと言うことですね。今聞いた個人的な話は破って捨てます」で終わりました。この先生には大変お世話になり感謝しておりますが、一方で非常に違和感を感じます。私は夫を亡くしてちょうど1週間目でした。追い討ちに等しい思いです。

当初、私は軽々しく物を言うべきでないと考え、本人の限界であったと答えておりました。年齢的に体に変調の出始める時期であったのかも知れませんが、何を言っても元には戻せず全ては手遅れとの思いもあり、これまで黙って過ごして参りましたがどうしても納得がいきません。

私に、話せば少しは気が楽になるのではないかと声をかけ、大学に対して居たたまれないのではないかと、死というものは美化したくなるが、ここは2人目、3人目の犠牲者が出るかも知れないと話された教授がおられます。夫は仕事は変わりなくこなしておりましたが、死亡する約1週間前、急に様子が変わったと申しますと、「その頃ある先生とやり合っています。恐らくその後は空元気でしょう」と言われました。

私から先に話を持ち出した事は一度もありません。教授の方々からこのような話がでる事自体、助手採用の件が影響したことは明らかではないでしょうか。研究科内でそれなりの措置がとられ、何らかの説明があると信じておりましたが何もありませんでした。

助手の席を[]の分としながら[]研究科の教授の間で取り合った事が一因ではないのでしょうか。夫が死亡した途端、叩いた側、押した側、傍観していた人が、それぞれの思いを私に投げつけてそのまま何事も無かったように静まりかえっています。寝た子を起こすという言葉がありますが、たたき起こされて生き埋めにされる思いです。

お参りに来られた助教授の方が、「もっと話を聞いてあげれば良かった。お疲れさまでした」と、遺影に声をかけて帰られました。教授夫人から、「ひどいわね。こんな大学、主人の定年まで持てばもういいわ」という非常識な言葉をかけられた事もあります。[]突然死亡し、その時にこれほど普通でない対応や話が續くと居たたまれないの一言につきます。最後の約1週間の状況を詳しく知りたいと思います。本当に誰にも責任はないのでしょうか。皆様は、ご自身の事であったらこれを納得されますか。

学長の指示だったと耳にする事もあります。私には、学長の立場にある方がセンターの一助教授を死ぬまで叩くとは信じられません。大学ぐるみでないことをお示し下さいます事を心よりお願い申し上げます。

かしこ

[] 9月17日